

御名があがめられますように

私たちは毎週の礼拝において「主の祈り」を共に祈っているが、それはキリスト者が、誰に向って祈り、何を祈り、どう祈るかを示す、祈りの模範であり、ひな形である。その構造はまず、呼びかけで始まり、六つの祈願が続き、そして神の御名を称える頌栄で終わる（頌栄は主な写本に欠けているため邦訳聖書では省かれている）。六つの祈願のうち、初めの三つは神の栄光を求める祈りであり、他の三つは私たちの必要を訴える祈りである。

この順序はきわめて大切である。この祈りの構造に祈りの精神が教えられていると言っている。私たちはしばしば、祈りとは、ああして欲しい、こうして欲しい、と自分の願いを一方的に神に訴えることだと考える。確かにキリスト者はこの地上で神の民としてふさわしく生きるために必要なものを何でも神に求めることが許されている。

しかし「主の祈り」は、祈りの本質がもっと深いところにあることを教える。私たちの願いを神にかなえてもらう、つまり、私たちの願いに神を従わせるのではなく、私たちが生きているこの世界と私たちの日々の生活において、何はさておいてもまず神の御名があがめられ、神のみ心になり、神の国が実現するようにと、神の栄光とその御心を求め、それに信頼しゆだねて生きる、徹底的な神中心の祈りである。

「主の祈り」の第1の祈願は「御名があがめられますように」である。御名とは神ご自身を表すユダヤ的表現であり、崇められるとは、もともと「聖とする、聖別する」の意味の受け身形である。

神は、モーセを通してこう言われた、「あなたたちは聖なる者となりなさい。あなたたちの神、主であるわたしは聖なる者である。・・・あなたたちはわたしの戒めを忠実に守りなさい。わたしは主である。わたしはイスラエルの人々のうちにあつて聖別されたものである。わたしはあなたたちを聖別する主である」（レビ記19：2、22：31～32）。

神は「聖なる方」と呼ばれ（イザヤ40：25、43：15）、神の民イスラエルは「聖なる民」と呼ばれ（出エジプト19：6、申命記7：6）、従って、彼らは神の民として、聖なるお方の聖なる御名を汚してはならない、と繰り返し命じられた（レビ2：32、エゼキエル20：39）。

この精神は当然新約の教会に受け継がれた（第1ペトロ1：13～17）。従ってこの戒めは新約の民である私たちに対する戒めの言葉でもある。「御名をあがめさせ給え」とは、人々があなたの御名を崇めますように、という祈りではない。それはまず、この私が、そのようにあなたの御名を崇める者とならせて下さい、という祈りである。すなわち、生活の全領域において、何事をするにおいても、まず、神の御名があがめられるように生きることを求める祈りである。そしてそのように願い、そのように生きるのがキリスト者の祈りの第1であることを教えている。

これは、自分の栄光を求めるファリサイ的偽善の祈りとはまったく対称的な祈りである（6：1～8）。祈ることは生きることである。主イエスは、この祈りを教えることによって、キリスト者が、「御名を崇めさせ給え」と祈るだけでなく、祈った通り、そのように、日々、真実に神の御名をあがめつつ生きるようにと私たちを召しておられるのである。